2024年12月8日 待降節第2主日礼拝メッセージ

「驚くべき不信仰」　　水谷憲牧師

聖書 マタイによる福音書 13章53−58節

「知」という漢字は「矢」と「口」とでできています。それは、弓から放たれた矢が的に向かってひゅっとまっすぐ飛んでいって当たるように、「物事を、正確に口で言い表すことができる」ということから来ているのだそうです。物事を、正確に口で言い表すことができて、はじめて「知っている」ということになるのだというわけです。それで、私もいろいろ知りたくてインターネットで検索したりするわけですが、昔「不信仰」という言葉でいろいろ情報を集めていた時に、面白いホームページを見つけたことがあったんです。「真面目に恋愛をしたいあなたに」というもので、「恋愛をうまくいくようにするには、まず恋愛がうまくできない人のタイプを知る必要がある」と、そして「それは聖書にヒントがあるんだ」というものでした。「恋愛がうまくできない人」には4つのタイプがあって、1つ目は「パリサイ人的人間」（表面だけうまく取り繕おうとする）、2つ目は「ヘロデ的人間」（不誠実でも楽しければいい）、3つ目は「ローマ兵的人間」（暴力的に自分の意見を無理やり通そうとする）、そして4つ目が「不信仰的人間」（人の話を聞かない、疑い深い）だというわけです。なかなか面白い分析結果でありました。

本日の聖書は、イエス・キリストが故郷であるナザレの人々に受け入れられない、という話です。この話は「マルコによる福音書」、「ルカによる福音書」にも伝えられています。イエスさまが、故郷であるこのナザレの地で育っていった過程がどのようなものであったのかは詳しくは分かりません。「ルカによる福音書」2章40節や52節には、「幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた」とか「イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人とに愛された」などと記述してあるだけです。まあこのような記述から、周りの人々からも大きな愛情を受けて、少年だったイエスさまはすくすくと育っていったのではないかとは思いますが、しかしもしかすると、その一方でイエスさまにも、時には何か辛い思いを味わったりした経験などもあったのではなかったか。学生の時、スポーツ新聞を読んでいると、武田鉄矢さんが何やらのコラムで「優しいという字は、人偏（にんべん）に『憂い』と書くんだ」と書いていました。そういえば彼は、ご自身の歌でも「♪人は悲しみが多いほど人には優しく出来るのだから～♪」と歌っておったわけです。私たちのキリストは、世界の片隅に追いやられてしまっている者の抱える苦しみや痛み、また私たちが人知れず流している涙に気付いて下さり、そこに寄り添って手を差し伸べ、慰め、

励ましを与えて下さる方です。それはきっと、ご自身でもそのような経験をしてこられたからかも知れません。まあ、ナザレ時代のイエスさまがどのような歩みをしてこられたのかはともかく、彼は成長して神の言葉を取り次ぐ者として宣教を始められました。そんな彼が故郷ナザレに戻ってきた時の話が今日のこの箇所だというわけです。

イエスさまの若い頃を知っている地元の者たちにとっては、よく知っているイエスが故郷に帰ってきて、会堂で人々に教えるといったことが全く意外なことだったのかもしれません。「人々は驚いて言った。『この人は、このような知恵と奇跡を行う力をどこから得たのだろう。この人は大工の息子ではないか。母親はマリアといい、兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。姉妹たちは皆、我々と一緒に住んでいるではないか。この人はこんなことをすべて、一体どこから得たのだろう』」。ここで書かれている「この人は」という言葉、これは実際はもっと軽蔑をこめた表現であり、「こいつは」というようなニュアンスだったのだそうです。さらに、ユダヤ人の習わしでは、子どもは、たとえ父親が死んでいたとしても、父親の名前によって「〇〇の息子」と呼ばれていたそうなので、イエスさまは本来当時の習慣に従うと「ヨセフの息子」と呼ばれるはずなのですが、彼らは「大工の息子」とイエスさまのことを呼んでいるわけです。ヨセフの名前も出てこない、父親の名前などどうでも良い、たかが大工の息子じゃないか、というような言い方だったわけです。一方、「マルコによる福音書」では、イエスは「マリアの息子」と母親の名前で呼ばれているわけですが、それは、イエスさまの誕生物語を思い出してほしいのですが、父親がどこの誰かもわからんという中傷的・侮蔑的な意味が多分に込められていたのに違いないと言われています。そして何より、イエスさまの事を話すときに、親の仕事が何で母親が誰か、兄弟は誰で、といったことは全く余計なお世話であり、そう考えただけでも、この故郷の人々の言い草は非常に侮辱的なものであると言わざるをえない。彼らは、何でイエスさまのことをそんな風に言うのでしょう。

彼らは、イエスさまに関する昔の記憶、やれ鼻水垂らしてその辺を走り回っておったとか、泣き虫だったとか、がき大将だったとか、根暗だったとか、知りませんけど、そんな記憶が邪魔をして、イエスさまの現在の姿について素直に評価できていないのです。そしてその素直で公平な評価というものは、関係が近いほど難しくなるものかもしれません。マルコ３章２１節を見ると、悪霊を追い出しているイエスさまのところに「身内の人たちはイエスのことを聞いて取り押さえに来た。『あの男は気が変になっている』と言われたからである」とあります。「何をへんなことをやっ

ているんだ。人様に迷惑をかけるんじゃない、身内に迷惑をかけるんじゃない」などという言葉が聞こえてきそうな場面です。身内でさえもイエスさまのことを正しく見てあげられていなかったのです。ルカの4章、本日の箇所と同じ話の箇所においては、イエスが「預言者は故郷では敬われないものだ」と言ったところ、「会堂内の人は皆憤慨し、総立ちになって、イエスを町の外に追い出し、山の崖まで連れて行き、突き落とそうとした」と記されています。イエスさまはよりによって、自分が育った故郷の人々に殺されるところでした。昔を知っていようがいまいが、相手をありのまま、先入観なしに受け止め、評価することができなければ、そこにいくら神の福音が語られ、奇跡の業がなされたところで、届くことはない、理解されることはないのです。

私たちも日常において、誰かを「～の息子」「～の娘」「～の仕事をしている人」「仕事をしていない人」「～の奥さん」「信仰歴〇〇年」「クリスチャンでない人」「年齢が〇〇才」といった、こちらが一方的に貼り付けた様々なレッテルに頼って判断しがちになってはいないでしょうか。「ああ、あの人ね」なんて、それでその人のことを何となく知った気になってはいないでしょうか。もちろん、新しく関係を作っていく過程においては、そのような要素は非常に有効です。しかしそれは所詮関係作りのとっかかりでしかなく、それから先、互いに関係を強めていく過程においては、そんなレッテルはもはや必要ないんです。私たちは大丈夫でしょうか。

「～の〇〇」というレッテルは、非常に分かりやすく、相手との距離を計ったり縮めていくうえではとても有効です。子供の頃のことをよく知っているというのも、その人との関係を大切にしていくのに決してマイナスではありません。しかし、時は止まることなく流れています。いつまでたっても上辺だけの関係で止まったままで、そこから新しくその人との出会いを重ねていくことをしなければ、本当に相手と深い関係を作っていくことは出来ない。だって、イエスさまに四六時中付き従っていた弟子たちでさえ、イエスさまが死んでしまうまで、本当にイエスさまについて深く理解する事は出来なかったんです。相手との距離が近かったり、あるいは、相手との距離が近いと思い込んでいたりすると、かえってその人のことが見えにくくなっている、という事もあるんじゃないでしょうか。反対に、イエスさまに一度も生で出会ったことのないパウロの方が、イエスさまのことをよく理解していたのかも知れません。生のイエスさまに出会ったこともないパウロが精力的に活動したからこそ、今のキリスト教があるといっても言い過ぎではないでしょう。相手との距離が近いというへんな思い込みがないからこそ、かえってよく見えてくるものもあるのではな

いでしょうか。私たちも、誰かと関係を作っていく時に、自分はその人のことをこんなに知っているんだというへんな思い込みやレッテルに捕らわれず、絶えず新しい一面と出会いながら、豊かな人間関係を作っていきたいものだと思います。

最後に、イエスさまは「人々が不信仰だったので、そこではあまり奇跡をなさらなかった」とあります。マルコ福音書によると「そこでは、ごくわずかの病人に手を置いていやされただけで、その他は何も奇跡を行うことがおできにならなかった。そして、人々の不信仰に驚かれた」となっています。人々のあまりの不信仰に驚いて、奇跡を行うことがほとんどできなかったのです。不信仰さとは、はじめにお話した例で言うと「人の話を聞かない、疑い深い」といった姿勢です。勝手な昔のイメージにとらわれて素直に相手を評価できないから、その話もまともに聞くことができない、相手の話を信用できない、それはいずれも神様が私たちに望んでおられる兄弟姉妹としての関係のあり方ではありません。そして先程も言いましたけれども、そこにはイエスさまがいくら神の国の福音をのべ伝えようとしても、不思議な業を持って神様の力を証しようとされても、決して届かないのです。イエスさまが奇跡を行うことがおできにならなかった、それはイエスさまの言葉、そして神様の御力を人々が受け入れなかったからであり、そこからは私たちの信仰の姿勢も厳しく問われているように思います。私たちも、イエスさまに不信仰さを驚かれないように、もしくは信仰を固く守って逆に驚いていただけるようになりたいものです。

今日は待降節の第 2 主日ですが、クリスマスも今や宗教を越えた一大イベントであり、知らない者はいないほどの行事です。そのようなクリスマスはこれまで2000 回近くも祝われてきただけに、私たちもみんなクリスマスといえばそれなりのイメージがぱっと思い浮かぶし、クリスマスとはどういう日かということも、いくらかはぱっと答えられるわけです。しかし私たちは、クリスマスが毎年毎年来るがゆえに、かえってクリスマスの本当の意味を見過ごしてしまっていることもあるかも知れません。毎年のルーチンワークのようにクリスマスを迎えることで、私たちの心にはクリスマスに対する新鮮な気持ちが薄れてきてはいないでしょうか。クリスマスの感動・喜び・慰めなどの思いを新たにできるように、「ああ知っているわ」「いつものあれね」などと自分の中で固めてしまったイメージというおがくずを、謙虚に私たちの目から取り除いてクリスマスに向けて備えていきたいものだと思います。